

最初の弟子たち

ヨハネによる福音 1:35-42

(そのとき、) ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った。二人の弟子はそれを聞いて、イエスに**従った**。イエスは振り返り、彼らが**従って**来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ——『先生』という意味——どこに泊まっておられるのですか」と言うと、イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らは**ついて行って**、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうち一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア——『油を注がれた者』という意味——に出会った」と言った。そして、シモンをイエスのところに連れて行った。イエスは彼を見つめて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ——『岩』という意味——と呼ぶことにする」と言われた。

まえがき

今回の福音には、「ついていく」「従う」が3回繰り返されています(37節/38節/40節)。「従う」とはイエスの<弟子になる>ことです(参照1)。弟子になるとは、イエスというお方を「知る」ことです(参照2)。イエスを知るとは、イエスの行なわれた業を自分も行なうように<変えられる>ことです。自分も行なうとは、人の真似ではなく、ほかに誰も行なっていない仕方で、自分だけの道を歩むことです(参照3)。

マタイ・マルコ・ルカの福音書では、イエスが「わたしに従いなさい」と言われると、シモンとその兄弟アンデレが、漁師の網を捨ててイエスに従ったとあります。いまではこれを、自分の職業を捨てて、イエスにお仕えするこ

と、つまり、牧師や司祭、職員など教会の教職になることだと解釈されています。しかしヨハネ福音書にはそのような職業、教職者になりなさいということを用いるのではなく、ただイエスと共に「泊まり」、その下に「留まる」ことだけをいっているようです。

共観福音書にある「網を捨てる」という意味を、網よりもイエスを選ぶことと解釈すると、人が自分の仕事・職業よりも、まず先にイエスを選ぶならば、その人はイエスに従う者です。自分の仕事を常にイエスのために用い、仕事を通してイエスを表すならば、後はイエスが導いてくださいます。「まず、神とその御国を求めなさい」とイエスが言われたのはこのことを言っているのでしょう。だから大いに自信をもってイエスに従ってください。あなたの今のままでイエスに従えるのです。人まねすることはないのです。無理をして立派な牧師先生や、先輩信者のまねをしなくてもいいのです、ここがキリスト教のいいところのひとつだとわたしは思っています。

どこに泊まっておられるのですか

さてきょうの福音では、洗礼者（ヨハネ）は、ふたりの弟子と一緒にイエスを見て「見よ、神の小羊だ」と証しました。ヨハネの弟子であった二人は、何を問うべきか？何かの答えを求めるのでもなく、なんにもわからずにただついて行きました。師匠に背中をおされた格好でイエスに従いました。

イエスは振り返り、彼らに従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ、どこに泊まっておられるのですか」というと 1:38

おそらく事情が飲み込んでいるイエスは彼らにむかって「何を求めているのか」とストレートに質問します。しかしよくわかっていない彼らはトンチンカンを言います。イエスの問いに問いで答えてしまった。

「ラビ、どこに泊まっておられるのですか」

いまふうにいえば、イエスの後を二人の男がついて行って（ストーカーのようですが）イエスになんてついてくるの？（何を求めているのか）ときかれ、ケー

タイの番号教えてと答えるようなものです。ほんとうに、彼らはイエスのきょうの寝所を尋ねているのでしょうか。

そうではなくて、イエスというお方が、あなたがほんとうに宿っておられる場、それはいったいどこなのか？　ほんとうは彼らはこう尋ねているのです。

(と解釈します、なんでそうなるのかは原語ではこうで、ああだと長くなるので省きます)

来なさい。そうすれば分かる

そんな彼らにイエスは言われた。「来てごらん。そうしたら分かる」

これがイエスの「答え」です。結論です。そして彼らは(アンデレともう一人)はイエスに従う最初の弟子となりました。

その日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである

ヨハネ福音書は時間に細かいところがあります。この午後四時もその箇所です。なんで時間が書いてあるのか、そしてそれが4時である理由はなにか？

- 1) これは復活のイエスにであう弟子のエピソード、エマオへの道(ルカ24:13以下)に良く似ていると指摘されます。
- 2) 午後四時とは夕食の準備に取り掛かる時間と指摘もあります。四時とはずいぶん早いなおもったのですが、たしかにキャンプや山登りなどの夕食準備は4時ごろから初めないと暗くなってしまいます。むかしは午後四時といえば夕餉の準備開始時間であるといわれると確かにそうだと合点がいきます。
- 3) また原語で第十時(いまでいう16時)と書いてあるのでこれは完全数10を示すことで新たな時=救いのときの始まりを暗喩しているのだという説もあります。

午後四時の説明はいまいったようにいろいろあるのですが、決定版といえる解釈はないようなので、それぞれの解釈から自分で自由に考えてイメージをふくらましてください。たとえば、ヨハネの一章に書いてある最初の弟子たちへの招きの時刻が、ルカやマルコでは最期に記録されるエマオへの道の時刻に似ている。なんか午後四時っていいかんじの夕日があたっているのだろうな、とか、イエスさまの状況はずいぶん違っているけれど、弟子たちに

とっては同じように希望のイエスがいたんだろうなあ、とか、夕餉の準備と
いえば、最期の晩餐に似ている、イエスと同宿した二人の弟子（アンデレと名
無し）は晩御飯もイエスと一緒に食べたのだろうな、イエスの食前の祈りは
どんな祈りだったのだろう、パン裂きもイエスさまがやったのだろうな、な
どなど…。

さいごに

「来てごらん。そうしたら分かる」イエスについていく者は、だんだんイエ
スというお人が分かります。分かった者は共に歩みます。その歩みの中で自
分の問いを見出し、同時に答えを見出します。人生は一人で歩むべきもので
はなく、二人で歩むべきものです。インマヌエルの神です。われらとともに
います神と歩むのです。お遍路さん風にいえば「同行二人」（どうぎょうにに
ん）です。従う者は、必ずイエスの栄光をみるようになります（参照4）。それ
だけでなく、洗礼者ヨハネがしたように、アンデレが兄弟シモンにしたよう
に、自分も人をイエスに従わせる証し人になるのです。人が人を人に会わせ
る、この不思議が次々と起こります。「わたしたちはメシアに、いま出会っ
た」と。

参照1

8:12 イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光
を持つ。」

10:27 わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。

参照2

12:26 わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕
える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。」

参照3

21:22 イエスは言われた。「わたしの来るときまで彼が生きていることを、わたしが望んだとしても、
あなたに何の関係があるか。あなたは、わたしに従いなさい。」

参照4

2:11 イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子た
ちはイエスを信じた。

